

平成 19 年 1 月

座長の心得

所長 稲垣 一則

明けましておめでとうございます。

歌舞伎役者で二代目坂田藤十郎と当時の人気役者山下京右衛門の話。当時といっても江戸時代のこと、山下京右衛門が座長として取り仕切る舞台は連日大入り。そこにある日二代目がお忍びで芝居を見に……。二代目に気づいた京右衛門はここぞとばかりに大見得を切り、その姿に観客はやんやの大喝采。幕引き後京右衛門は大御所二代目からお褒めの言葉を期待して挨拶に……。ところが二代目からは一言「下手だね」。有頂天であった京右衛門はこの句が継げず「精進致します、ありがとうございました。」というのが精一杯。心の中は「二代目は俺の人気を妬んでのこと、認めたくないのだろう」とあしらっていました。

やがて明日が千秋楽という日、再び二代目が観客席に。前回のこともあり、今度こそ生涯最高の見得を切り二代目をギャフンといわそうと大張り切りの京右衛門。舞台でも前へ、前へといつも以上に乗り出し見得を切る。今日の京右衛門は一段とすごいね、と観客も大満足。終演後挨拶に行くと「ますますダメだね」と二代目。はらわたが煮えくりかえっても、そこは相手が二代目。しかしながら、やがてそうした気持ちは「何故……？」と変わっていった。

その夜、たまりかねた京右衛門は二代目の定宿に……。襖越しに「夜分に申し訳ありません。二代目、私の何処がダメなのでしょうか、お教えてください」と。中から二代目は「あなたの芝居、見得は大したものですが。でもあと半歩一步下がってやってみたらいかがでしょうか。とても素晴らしい舞台になりますよ」と。二代目は、一人が目立つことではなく皆を引き立てること、それが座長の役目、心得と諭したのです。千秋楽の舞台の素晴らしかったことはいうまでもありませんでした。

池波正太郎編集の「さわやかに生きた 88 人」というエッセイ集に載っている話です。「他を活かすこと = 全体を活かす = 自分を活かす」という論理展開になるのでしょうか。

以後、池波正太郎に填まっています。

本年も宜しくお願い致します。